

探究心のなんと深い研究者であ

るうか。『新大陸主義』（201
3年）がカルダー氏のライフワー

クだと思っていたのだが、さらに
彫り込んだこうまで鮮やかな著作
をみせつけられると、唸るよりほ
かない。

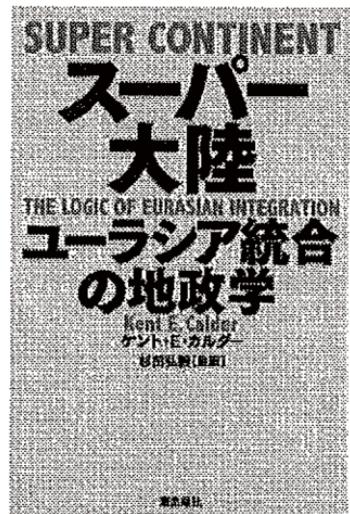
巨大な人口規模をもちながら
お一人当たり所得水準の低い中国
とインドが高成長局面に入っている
。2国のエネルギー需要の潜在
力は途方もない。この需要に対応
する天然資源の供給力はロシア、
中央アジアを含めて確かにユーラ
シア大陸の中には存在する。その
うえ需要と供給を結びつけるイン
フラの建設はかつてない速度でこ
の大陸の各国を連結しつつある。
それに輸送技術の革新、金融イノ
ベーションが加わって連結は相乗
効果をもつという。

この連結はユーラシアの各国の
力の総和をはるかに超える力とな

ケント・E・カルダー著

ユーラシアつなぐ力学 解明

つて噴出するであろうと著者は見
立てる。地政学的重要性が繰り返
し強調される。ユーラシアの西端
に位置する地つながりの欧州がこ
の力学と無縁であるはずがない。
現に欧州と中国との連結は急速に
進んでいる。そうしてユーラシア
大陸は米国大陸にかわる「スーパ
ー大陸」としてほどなくその姿を
現すであろうという。



原題=SUPER CONTINENT
(杉田弘毅監訳、潮出版社
・3500円)

▼著者は米ジョンズ・ホープ
キンス大高等国際問題研究
大学院副学長。

戦争、革命、昂揚する民族主義
により相互に摩擦熱を発し、反発
し合っていたユーラシア大陸の諸
国家がなぜ急速に連結を開始した
のか。中国の開放政策と一帯一路
構想、中国やインドのエネルギー
需要にはけ口を見出すロシアの自
然資源、イラン制裁やウクライナ
危機による米国の影響力の弱り、
さらには米国自身の一国主義への
傾き。20世紀に入る頃から露わと
なった諸要因が、これも相乘的に
作用して「新大陸主義」が顕在化
しつつあるという。

深い日本理解をもつ著者だが、
前著においても本書においても日
本がこの世紀的なトレンドにどう
対応すべきか、なぜかほとんど言
及されていない。日本はユーラシ
アの東端に位置しながら太平洋を
跨いで米国と同盟関係にある。衰
退しつつあるとはいえない世界第
3位の経済力を擁する。

海洋国家と大陸国家という概念
で時代を語ることがもはやアナク
ロニズムになったと著者はいいた
いのかもしれない。

《評》拓殖大学学事顧問
渡辺 利夫